

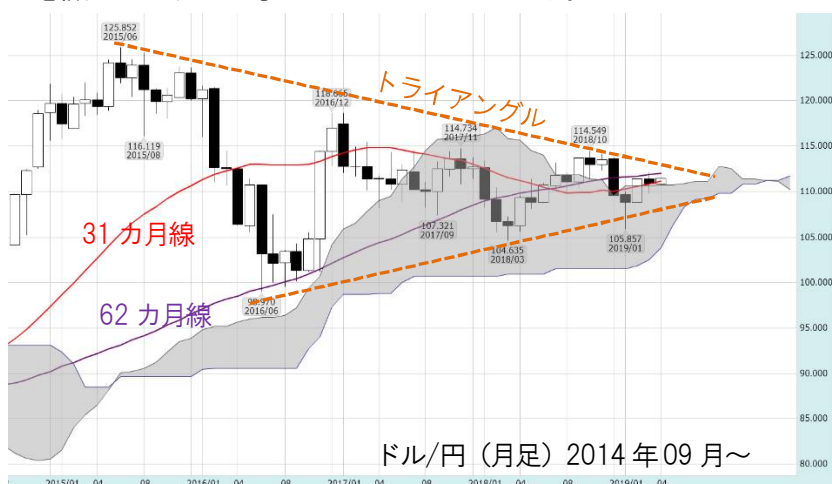
■ ドル/円の基調は確りしていると見るのが適当!?

前回更新分の本欄で「ドル/円の上値に関しては、まず89日線の抵抗が意識されやすい。さらに上方には21日線や200日線も控えており、これらを突破するには相応のポジティブな材料が求められる」と述べた。その後、ドル/円は89日線、21日線を次々に上抜ける強気の展開となり、ついには4/1には200日線を試すところまで値を上げたが、以降は同線にガッチリ上値を押さえられる格好となっている。

すでに、3月の中国PMIや米ISM製造業景気指数などが予想よりも強い結果であったことに加え、4/3から始まった閣僚級の米中通商協議が「順調に進んでいる模様」との報も伝わるなど、ポジティブな材料は少なからず出てきてはいる。とはいえ、今週は金曜日(4/5)に3月の米雇用統計の発表を控えており、まずは同指標の結果を見定めたいといったムードも色濃い。

また、今回の米中両国による通商問題の閣僚級協議は5日まで予定されており、その結果も大いに気になる。これらの結果が「ドル/円が200日線をクリアにブレイクできるかどうか」を大きく左右することとなる。

なお、3月のドル/円の月足・終値は結局、一目均衡表の月足「雲」上限や31カ月線を上抜ける格好となった(下図参照)。これは2カ月連続のことであり、相応にドル/円の基調は確りしていると見るのが適当であると思われる。いまだ、すぐ上方には62カ月線が控えており(現在は112.04円に位置)、さしあたって同水準は3/5高値=112.14円とともに一つの上値抵抗として意識されやすいと考えることもできるだろう。



それだけに、こうした水準をクリアに上抜ける展開となって来た場合には、いよいよ2015年6月以降に形成してきた三角保ち合い(=トライアングル)を上放れ、そこから一段の上値余地を広げる可能性が高いものと思われる。

その一方、3月のユーロ/ドルは相変わらず一目均衡表の月足「雲」下限水準をトレースするような格好での推移となった。以前から述べているように、4月の月足「雲」下限は1.1000ドルを下回る水準まで一気に低下するわけで、場合によってはユーロ/ドルが同水準を試しに行く可能性もないではないと考える。

なにしろ、IHSマークイットが4/1に発表した3月の独・仏ならびにユーロ圏の製造業購買担当者景気指数(PMI)・改定値は、いずれも速報値を下方修正したものとなり、足下ではドイツの10年債利回りがマイナス圏とプラス圏を往ったり来たりするという不安定な状態が続いているのである。そうした状態を受けて、ECBが政策方針をタカ派寄りに傾けるはずもなく、4/2に発表されたECB年次報告書の序文ではドラギ総裁が「中期的に域内の物価圧力を確実に積み上げていくには、金融政策による大規模な刺激が依然欠かせない」と言明していた。

そうしたなか、市場は米中通商協議の進展への期待を強めており、結果的に期待が現実のものとなれば、米中景気の先行きに対する見通しもこれまでとは大きく変わってくるものと思われる。もちろん、中国の景気減速に歯止めがかかれば、それはユーロ圏にとっても朗報であって必ずしもドル高一辺倒ではない。ただし、一方でリスクオンムードの広がりがドル/円の上値余地を広げる可能性もあり、当面はそのあたりのところを見極める時間帯ということになりそうだ。

(04月04日 11:00)